討論　歴史的な『逆・革命』　東京新聞-1991.08.26

〔5〕 総合 12版　1991年(平成3年)8月26日(月曜日)　東京新聞　(第3種郵便物認可)

ソ連情勢

識者クロス討論

ロシア革命以来、七十三年余、世界の社会主義運動をリードしてきたソ連共産党の解体が、二十四日のゴルバチョフ大統領の声明で決定的となった。同時にゴルバチョフ氏も党書記長の辞任を表明。今後のソ連はどうなるか、中国など他の社会主義国への波及は――など、ソ連、中国、国際政治の専門家に語ってもらった。

歴史的な『逆・革命』

党の束縛から解放、自由に

中嶋嶺雄 東京外語大教授

これは革命だ。八月十九日の保守派クーデターに対し、今回の共産党解散はエリツィン・クーデター、改革派の革命、下からの革命と呼んでよかろう。私は過去三十二年間、ソ連を研究してきたが、これほどの変化、これほどの驚きを経験したことがない。

ソ連共産党というのは西側世界の概念でいう政党ではない。共産党が支配する国家――といわれてきたが、党と国家は密接不可分に結びついていて、党イコール国家、国家イコール党であった。共産党は国家機関であり、行政機関でもあって、あらゆるものの中核であったのだ。共産党がなくなったソ連というのは木々のない森、水のない大洋と同義語といってよいほどのものである。

こうなった背景には、まず共産党イデオロギーの硬直性があげられる。共産主義思想が百年前、マルクス、エンゲルスによって創造されたときは、資本主義社会を批判する役割をよく果たしたが、現在は階級対立はもとより民族や人種などさまざまな対立や矛盾を解決できないばかりか、それをより鋭くしてさえいる。資本主義社会がハイテク時代を迎え、多様な意見を取り入れ、修正しているのと好対照といえよう。これは教条、ドグマにこだわって、柔軟な発想の現代社会への適用を怠った指導者の責任といえよう。

木村汎 国際日本文化研究センター教授

硬直性が致命傷に

素直に解散せず地下組織に走る

つて千九百万人いた党員が急激に減ったとはいえ、まだ千五百万人もいる。

次に、ゴルバチョフは党書記長を辞任しても大統領ポストにはとどまる。エリツィンも大統領辞任までは圧力をかけない、と思う。そこまでやらなくても、ゴルバチョフが来年中に辞任することがはっきりしている。

新連邦条約も九月中に調印されるだろうが、そこには憲法改正がうたわれ、連邦大統領選挙もやり直すとの規定が盛り込まれている。

それにエリツィンにとって、ゴルバチョフはもう政敵でも何でもない。クーデターにより、クリミアで監禁されたところを助けられたゴルバチョフは、エリツィンには頭が上がらない。そんなゴルバチョフを倒してみても得るものは何もない。

それどころか、エリツィンは今、やり過ぎないことが求められている。彼は今や与党になったのであり、民衆の急進的要求に対し手綱をぐっと引き締めないと、不満がエリツィンへ向きかねない。エリツィンの〝ゴルバチョフ化〟だ。

エリツィンの前途には暗雲が垂れ込めているといわざるを得ない。この非常時を乗り越えるため、彼の強権化もあり得る。

最後に外交上のインパクトはどうなるか。

西側では、改めて対ソ支援増大の大合唱となろう。この混乱期の援助は、精神的な励ましにはなっても、実質的には意味がないと私は思う。

エリツィン外交は今の段階では、不透明である。ゴルバチョフ外交の路線を継承するのか、アジア・太平洋を重視するのか、北方領土で厳しい態度か――など今は情報収集に全力を注ぐのがよい。

国際共産主義運動への影響は既に過去のものとなっていた。中国、北朝鮮、ベトナム、キューバなどに対しても同志的な援助はなくなっていくだろう。キューバは五カ年計画の策定さえ立てられないところへ追い込まれている。

ゴルバチョフ・ソ連大統領の声明は、来るべきものが来た感じだ。彼自身、共産党にがんじがらめになっており、書記長として拘束されていた。それがゴルバチョフの限界だったが、今、党の束縛から解放された。

私は、ゴルバチョフは「改宗していた確信犯」と思う。政治家として心にある部分はこれまで出せなかったが、今回、ようやく自由の身になった。

ゴルバチョフは、ペレストロイカの国家体制総仕上げは、英連邦のように、独立した共和国の緩やかな連邦体制を考えていたと思う。それに脱共産主義体制だ。

歴史の動くときは、弾みが一気につく。今回の声明は、歴史的な「逆・革命（カウンター・レボリューション）」である。

中国はゴルバチョフ声明にものすごい衝撃を受けている。人民日報は、八人組クーデターを紹介した際、他の国と違い、クーデター側にくみするような報道ぶりだった。

ソ連の一連の事態が報道されれば、天安門事件で当局が犯した重大な罪を国民から問われることになる。経済は労しくなく、犯罪は急増。中国共産党の威信は低下していて、下から崩れることはないと。当面、この体制を維持しながら、活路を西側、とくに日本に求めていこう。しかし金日成（主席）にもしたたかったら、息子の正日（書記）ではうまくできない。

西側諸国は、ソ連から超大国の影がなくなっている方がよい。ソ連の存在自体が大きいから、当面、状況を見守っていこう。もっと踏み込んだ対ソ支援を行うにあたって、二重政権、つまり連邦と共和国、とくにロシア共和国との関係を深めていこう。

ソ連は今後、多元的でカラフルなソ連が出現してくる。そこをきちんとやっていくことは大変なことだ。日本のこれまでの対応は、これでいいのかという気がする。

遅かった辞任表明

党と中道勢力制御に限界

宇多文雄 上智大教授

ゴルバチョフ氏はここまでよくがんばってきたと思う。

党書記長は党解散を勧告、命令できるのだから、もっと早く、例えば複数政党制を言い出した時に、書記長を辞任すべきだった。一党独裁と民主主義とは正反対なものだから、最初から矛盾がある。矛盾を内包しながらペレストロイカを進めてきた。それを進める上でゴルバチョフ氏は党にも中道勢力にも、二兎の船に両足をかけて、巧みにコントロールしながらやってきた。しかし、両足をかけておくことができなくなったようだ。今後、これらの動きはジグザグするだろうが、ある程度いくと逆に求心力が働くときがあるのではないか。

石が投げられ、波紋が広がっているところへ、もう一度石が落ちたようなものだ。

また、ソ連邦の解体が加速され、現実的となってきた。今後、これらの動きはジグザグするだろうが、ある程度いくと逆に求心力が働くときがあるのではないか。

中国共産党は相当なショックを受けていると思う。中国でも何かのきっかけで、下からの改革で党が一夜にしてひっくり返る可能性は否定できない。

八九年の天安門事件が東欧革命のきっかけとなったといわれているのだから、今回のソ連の動きに対し、中国は国内への影響を恐れ、各方面にわたって引き締めを強化、党の指導強化も再確認されよう。中国はクーデター直後に、間接的ながらソ連の政変を支持したが、これは外交的には大失態だった。

中国はもともと米ソ協調のもと中国も変えようという米国の戦略に警戒していたのだが、警戒の度は一層強くなる。中国と比べると、同じ共産党指導国家でも朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）、ベトナムはショックはやや小さいだろう。

両者ともソ連も中国も頼りにならないことがわかっている。三国ともそれぞれ独自の道を歩きはじめている。また、中国にしてもソ連との関係が「よくなる」ことがなくなっただけで、これ以上悪くなることはないだろう。

衝撃大きい中国

波及恐れ引き締め強化

稲垣清 三菱総研主任研究員

場当たり的な対応

民衆の意識変化読み誤る

正垣親一 ソ連問題研究家

ゴルバチョフ氏の党書記長辞任は遅すぎた。今となっては、彼が生き残るのには、西側諸国がこの二、三日以内にゴルバチョフ氏の気付で援助資金を大挙して送った場合のみだろう。援助資金を送らなかったり、それがエリツィン氏の気付だったりしたら、彼は五、六日以内に大統領職を辞任せざるを得なくなるのではないか。共産党文書が押収されて、旧悪も続々と暴露されそうだから、それだけでも、ゴルバチョフ氏は終わりである。湾岸危機中、イラクがレニングラード市長だと思う。事実、私のソ連の友人たちもさきほどの国際電話で興奮しながら、「街の声」としてそれを伝えてきた。

彼が政界で生き残ろうとしたら、自分が本気で共産党と対決する意志があることを、人々に納得させなければならなかったのだ。精魂こめて強調したことは、厳しい非難がついて行動する人たちではないと思っていたが、今回もそういう場当たり的な面が出たようで、民衆はゴルバチョフ氏から離れてしまった。時代と民衆の意識の変化を読み誤ったと思う。

そして、党の解体を決意したが、これとて党内の制度に失望したためではなく、民衆の党攻撃の熱狂と、その熱狂の波をサーファーのごとく乗りこなしているエリツィン氏に恐れおののいてのことだったのだ。

もともと私はゴルバチョフ氏は信念があって、それに基づいて行動する人たちではないと思っていたが、今回もそういう場当たり的な面が出たような気がする。

制裁に賛成しながら、陰で武器や資金援助をしていたとの情報もある。

後任人事が問題だが、私は若さ、実務経験、非共産党員などの理由からサプチャク・

ソ連激

社

明治大教授 岡野 加穂

ソ連共産党の崩壊を聞いて、日本では共産党はもとより社民勢力もこれを深刻に受け止めるべきだとつくづく感じている。

西欧の先進工業国では、おおむね社民勢力が強い。福祉国家建設への邁行している。

引き換え、依

対ソ技術支援を拡充

政府は、ソ連内のホテルで関係閣僚会の対ソ支援策の結果、ソ連定など「ソ連歓迎、政治する立場から・サミット議）で合意見直すために開かれ7）個人代議）に積極

政府は、宣言を受けて面的な再構築

政府はエ共和国大統領るソ連の現状関係を根本的ンスがきた」判断、従来からある「拡大均衡」ではなく、ながら、北方領ソ関係の全面